

## ライフストーリー

稲葉奈々子

### マーガレット（仮名）—女性器切除を逃れて来日

#### 来日まで

ナイジェリアのデルタ州出身、1968年生まれです。母語のイソコ語は、話せるけれど書けません。家族とは英語で話していました。デルタ州は聖公会信者が多いのですが、私の曾祖父母は聖公会の教会を村に開設した人です。家族は全員キリスト教で、聖公会の主教や牧師として働く親戚もいました。そのためキリスト教文化のなかで育ちました。

中学校に通っていたときに、キリスト教についてさらに深く学ぶ機会がありました。授業で学んだのではなく、学校で聖公会とは別のグループに出会ったのです。「新生」と呼ばれるグループです。(宗教実践として)歌ったり、ダンスをしたりするのです。家に帰れば親の宗教を尊重して聖公会の教会に通いましたが、家を出てからは自分の信仰を守りました。

家を出たのは14歳の時です。中学は卒業できませんでした。親とも縁を切りました。母は教師で、父は政府の役人でした。家は豊かだったわけではないですが、物乞いでもありませんでした。(日本では)アフリカからきた人は貧しい人のように思われていますが、ミドルクラスの家庭から来ている人のほうが多いです。アフリカ出身者は物乞いではありません。私の曾祖父はヤシ油の商売をしていて豊かな生活をしていました。私も、日本に来たのは、食い詰めたからではありません。

家を出た理由は、女性器切除を逃れるためです。母は、女性器切除のために、子どもを何人も亡くしました。それで私には女性器切除はさせたくなかったのです。しかし父親はそれを受け入れませんでした。家に居続ければ、女性器切除を強制されます。それで母は私が家を出ることに協力してくれました。さらに中学校の友だちのおかげで、大学のキャンパスの学生寮に住みました。登録せずに大学の授業に出席していました。もしナイジェリアにいたら、大学を卒業して、日本の大学生のように就職活動をして働いていたでしょう。ナイジェリアでは、教育を受けないとよい仕事に就けないので、親は教育に熱心で、子どもは皆学校に行きます。

かくまってくれた友だちの父親は世界銀行で働いていました。それで私がナイジェリアから逃れて外国に行くために必要なすべてのことをやってくれました。そのとき、日本かドイツに行く選択肢がありました。こんなことになると知っていたら、日本には来ませんでした。ナイジェリアに遊びに来ていた日本人の若い男性から、日本はとてもよいところで、英語を教える仕事ができるだろう、という話を聞いたことがありました。彼は北海

道出身で、クリスチャンでした。それでドイツに行くか、日本に行くか、という選択を迫られたとき、日本に行くことにしました。その日本人も助けてくれるだろう思ったのです。結局、その人には会えなかったのですが。

友だちの親は、ブローカーは使わずに、日本に来る手配をしてくれました。その頃は、ナイジェリアはアフリカでもっとも豊かな国で、外国に出稼ぎに行く必要はなかったので、ナイジェリア人の外国渡航のためのブローカーはいませんでした。その頃は日本に行くのも大変ではありませんでした。それで観光ビザを取得しました。1991年、19歳でした。それから30年も経ちました。日本で人生を浪費しました。

### 来日後

出発のとき、友だちの親が3000ドル持たせてくれました。日本に誰も知り合いはいませんでした。まず、成田空港から池袋に行って、池袋のメトロポリタン・ホテルに2日間泊まりました。そのあと、どうしたらいいかわかりませんでした。その頃は、今ほど日本にナイジェリア人もいませんでした。ベンチに座って、どうしたらいいか考えていると、黒人が通りかかりました。親切そうな人だったので話しかけたら、ナイジェリア人でした。私がラゴスから来たといったら、私の学校時代の話などをたずねてきました。その人は学生運動のリーダーで、民衆蜂起のオーガナイザーでした。私もその蜂起に参加していましたし、その人の名前を知っていました。彼は学生運動で弾圧を受けて日本に来たのでした。

その人に、どこに行ったらいいかわからないと言ったら、友だちの家に泊まれるように手配してくれました。日本人と結婚したナイジェリア人でした。妻も親切な人で、仕事もみつけてくれました。2週間その家に世話になってから、紹介してくれた工場のある地域に引っ越しました。大きな印刷工場でした。

7年間ぐらいその印刷工場で働きましたが、景気が悪くなってきました。解雇された人もいましたが、私は解雇されませんでした。私は工場の女王様のように扱われていました。本当にいい人たちでした。日本政府の私に対する仕打ちを忘れてもいいと思えるぐらいです。日本人で不親切な人に会ったことはありません。食べ物があるかどうかを心配して電話をくれたり、アパートも貸してもらっています。お金のサポートもしてくれています。保証人も日本人です。日本人は、一般に外国人には不親切かもしれませんが、私には親切にしてくれました。

印刷会社は結局3か月分の給料をもらって解雇になりました。それからナイジェリア人が紹介してくれた別の印刷会社で働きました。その頃から、入管が人を捕まえるようになって、怖くなってその会社を辞めました。

そのあとは大きなクリーニング工場で働いていましたが、2011年に私も入管に捕まりました。在留資格をもらうために2005年に自分で入管に出頭したのです。その後、インタビューが何度も繰り返され、最後のインタビューの日に入管に収容されました。その日、パ

スポーツを持って来るようにと言われたので、ビザがもらえるのだと思って喜んで行ったら、もう外にでられないと言われました。ショックでした。外に出してくれるように泣いて頼みましたが、10か月間収容されました。

### 入管内での抵抗

入管の中で自殺をする人もいるし、ハンガーストライキをする人もいます。私はそうした人たちを病院に連れていかせるために、入管と闘いました。自分が仮放免になるときも、全員を仮放免にしろと要求しました。

あるとき、ハンガーストライキで死にかけている中国人の女性がいました。夫がいるのだから、死んではいけないと励ましました。彼女は4か月もハンガーストライキを続けました。自殺未遂も何度もしました。私は彼女を病院に連れていくことを要求しました。毎晩入管の意見箱に、病気の人を全員外に出すように要求を書いて投函しました。私は闘い続けました。それで病気の方は仮放免されていきました。前科があつて仮放免されない人もいますが、すでに服役して罪は償ったのだし、入管と刑務所は違うのだから仮放免すべきです。

ある女性がハンガーストライキをはじめたとき、他の女性たちに部屋の外にできるように呼びかけました。テレビをみたり電話をかけたりの「レクリエーション・ルーム」があるのですが、そこに、皆を集めました。そして部屋に戻らないように呼びかけました。1時間ぐらいレクリエーション・ルームにいました。収容者がレクリエーション・ルームに立ちこもるとするのは、入管職員にとっては、1時間でもとても長い時間です。

結局、その女性は仮放免になりました。ハンガーストライキについては、私は、「あなたが死んでも入管は気にかけないのだから、やめなさい」と説得していました。

2016年に2回目に収容されたときも10か月でした。そのうち7か月間は個室に入れられて、人にも会えませんでした。他の人と自由時間も違っていました。私が他の収容者に行動を働きかけたりしたためです。他の人が自由時間を終えて部屋に戻ったあとに、私は30分だけ自由時間が与えられました。その時間に電話をかけたりの、いろいろしなくてはなりません。

7か月たったところで、私は、「上司にあわせてくれないと、部屋に戻らない」と伝えました。「どうしたの。問題起こさないで」と言われましたが、「他の女性たちと一緒にいたい」と主張しました。交渉の結果、「問題を起こしたら、また個室に入る」と署名させられて、他の女性たちと一緒にの部屋に戻ることができました。「おねえさん、おねえさん」とみんなに迎えられました。入管職員の言う「問題」とは、「抗議行動」のことです。

私は2回目の収容のときに、皆と一緒にの部屋にいるときに、「デモ」をしました。全員を仮放免しろ、ビザをだせとデモをして要求しました。騒音を立てました。病気だったのに、収容所で放置されて、亡くなった男性がいたので、「どうしてあの男性を殺したんだ。病気

だと言っていたのに」と抗議しました。病気なのに解放しなかったのです。

他にも、15人のベトナム人の技能実習生が収容所に入ってきたことがありました。ベトナムで借金をしてきたのに、1か月17000円しか払われず、8人が一部屋で生活させられ、ひとりあたり40000円が毎月給料から差し引かれていたそうです。それで逃走したのですが、雇用主の通報で捕まったということでした。私は、雇用主に電話をかけて、なぜ通報したのか、なぜ賃金を払わないのかと、問いました。入管職員に、「あなた、妹いる？いるなら何歳？」と問いました。技能実習生の女性たちは18歳から25歳の人たちでした。自分の妹だったらどう思うか問いましたが、何もできないと言います。「この人たち、あなたの妹だと思って助けて」と頼みました。でも何もできないと言うのです。だったら上司を呼んでくれと頼んでも、呼んでくれません。それで弁護士の指宿さんに電話をして、賃金をもらっていない技能実習生がいることを伝えました。すべて、入管収容所の外にいたときは知らないことでした。

子どもがいるのに収容されている女性など、困難を抱えている女性と一緒に抗議をしました。入管職員に、「この女性は子どもがいるんだ、児童相談所に入れられているんだ、赤ん坊が母親のお乳をもらえなかったらどうするんだ」と抗議しました。偽装結婚したベトナム人女性もビザをもらえませんでしたし、万引きで捕まった女性もいて、ビザをもらえませんでした。

2016年に収容されたとき、男性の収容者がハンガーストライキの計画を伝えてきました。女性はどうかときかれ、私は、女性たちが死ぬのはいやだったので、やらないと答えました。

要望書のほうがハンガーストライキより効果があります。日本では、紙に書いたもののほうが、効果があります。単に口で言うよりも、書けばもっと効果があるのです。書いた要求を、入管職員はファイルしています。私が、入管職員に、上司は意見箱に入れた要望を読んでいるのかを確認したところ、読んでいるということでした。それで、毎晩意見を書いて投函して、病気の人が仮放免になったことがあります。テレビを視聴する時間も1時間延びました。それでBBCのニュースを見ることができるようになりました。

意見箱には誰でも投函できるし、要望がかなうこともあります。書かなかつたら、変化を起こせません。入管職員は部屋の前を巡回するだけで、中には入りません。中で何が起きているか、収容者が何を感じているかわからないのです。誰かが死にそうでも、気が付かないのです。

だから私は書きます。助けてくれ、彼女を解放してくれと。彼らも人間だから、それを読んで要望がかなうこともあります。身体で闘うことはできないので、書いたり、叫んだりしています。

## 仮放免後の面会活動

入管に収容されたことで、入管のなかで何が起きているかを知ったので、仮放免になったあと面会活動をするようになりました。仮放免で就労が許可されていないので、月曜日から金曜日まで毎日面会に行っています。月、水、金は東京に行く許可を入管でとっています。行く場所と行く時間をすべて届けています。2 か月ごとに入管に申告します。品川の入管には毎週月曜日に収容者の面会に行きます。教会にも行き、ミサのあとに活動しています。月曜日は小菅、府中、立川の刑務所の受刑者を訪問しています。木曜日は東京以外の刑務所の訪問の日です。横須賀、横浜などに行きます。日本人の受刑者の面会活動もしています。彼らは、誰かに面会してもらいたがっているのです。会いに来てほしいと手紙がきます。手紙があれば京都でも名古屋でも行きます。支援が必要な人から電話が毎日かかってきます。家にじっとしているわけにはいかないのです。私に会って幸せになる人がいるのです。

日本に来てから、いくつもの教会に行きました。10年ぐらい前に、食品を買いに大久保に行きました。大久保は安いのでたびたび行きます。そのときに教会のチラシをもらいました。配っている人にどこにあるのかをききました。10年ぐらい前のことです。私に平和を与えてくれるような教会を探していました。それが今の教会だったので、それ以来そこに通うようになりました。

### 日本に家族同様の人がいる

母は2011年に亡くなりました。入管から出たばかりのときでした。2017年に父が亡くなったときは入管に収容されているときでした。泣き崩れました。ナイジェリアにはもう戻りません。もう戻ってもしかたないのです。家族はナイジェリアにはいないからです。愛していた母が亡くなってしまったので、もうナイジェリアに帰る意味がないのです。今は、日本に家族同様の人がいます。

来日後3年たったときにナイジェリアに行きたくなりました。母親に会いたくなったのです。それでアメリカに行くときに、ナイジェリアを経由したのですが、結局入国しませんでした。空港から母に電話をしましたが、会わずにそのままアメリカにいきました。ナイジェリアにいるときはアメリカもいい国だと思っていたので、見てみたかったのです。住めるかもしれないとも思っていました。ナイジェリア人は世界中にいますが、アメリカでは高い地位や学歴をもっています。でも、行ってみると、アメリカには住めないと思いました。

学校時代の友だちを頼ってテキサスにいたのですが、犯罪が多すぎます。殺人やレイプなどが毎日あります。住んでいたコンドミニアムのゴミ箱に、赤ん坊が捨てられていたこともありました。ショックでした。アメリカには10年有効のビザで入国しました。オーバーステイではありませんでした。アメリカにいたれば住むことができました。でも、アメリカでは怖くて生活できなかつた。自分のやるべき仕事は、日本のように平和なところ

でやりたいと思いました。アメリカのようなクレイジーな国に行く必要はないし、殺人がしょっちゅうあるような場所に住めません。いともアメリカに住んでいて、来るように言われましたが、断りました。

私は、日本に何かを盗みに来たわけではないし、人を傷つけないために来たわけではありません。平和に生活するために来たのです。日本の平和な生活のほうがいいです。ここは夜中でも、駅から家にひとりで歩いて帰ることができて、自由に行動できます。

私はナイジェリアでは自由ではありませんでした。隠れなくてはならなかったから。外に自由にでられなかったのです。父が私を探していましたから。だから外出をしなかったし、遊びもしませんでした。酒を飲んだり、たばこを吸ったりもしませんでした。そもそも、ナイジェリアでは女性は飲酒や喫煙はできませんが。日本ではどこでも自由に行けます。今は仮放免で、移動にも許可が必要で自由ではないけれど。

(2020年8月29日に英語でインタビュー。日本語訳・再構成：稲葉奈々子)

## アヤ（仮名）—伝統宗教の生贄儀式から逃れて来日

## 来日まで

1987年、カメルーンの旧イギリス領英語圏の南西州のクンバの近くの村で生まれました。家は農業に従事していました。父は村を伝統的に支配してきた王族の出身です。私は一人っ子です。高校まではクンバ、大学はヤウンデで勉強しました。英語が母語で、家族とは英語で話していました。私のエスニック・グループはインギで、村で話されている言語もインギ語です。インギ語は理解できますが、話せません。学校教育はフランス語と英語で行われていますが、私は英語で教育を受けました。

ヤウンデの大学に通っていたときは生化学を専攻していましたが、3年で中退しました。というのも、私は一人っ子で、王である父の地位を継ぐ儀式を遂行しなくてはならなかったのです。女性は王にはなれないので、私の配偶者が王になるのですが、儀式は私がやらなくてはならないのです。親は特定の宗教に属しておらず、ローカルな伝統宗教を信仰していました。その信仰では、王位を継承するときに、神の祭壇に赤ちゃんを生贄として捧げなくてはならないのです。生贄にされる子どもを、どこから、どうやって連れてくるのかは知りませんが、王位を継承する子ども、つまり私が、その赤ちゃんを殺さなくてはならないのです。村に住んでいたときは、そんなことは知りませんでした。それを知らされても、そんなことはできないと思いました。私は、キリスト教の高校に通って寮生活をしているときに洗礼を受けてキリスト教徒になっていました。その信仰上もそんなことはできません。

カメルーンは政治は腐敗しているので、国はこうしたことに対して何もできません。自分で何とかしなくてはなりません。母は私のことを理解してくれて、カメルーンを離れて外国に行く支援をしてくれました。でも、私がカメルーンを離れた年に、母は亡くなりました。母は病気ではありませんでした。私が国を出るのを助けたために、殺されたのだと思います。

学校に行くのが好きだったし、大学を卒業したかったのですが、私はカメルーンを離れてタイに行くことにしました。カメルーンを離れることが目的だったので、どこの国に行くかは重要ではありませんでした。旅行会社に行って出国の相談をしたところ、タイに行くことを提案されたので、バンコク行きのチケットを手配してもらいました。大学の友だちの母親が、当面必要なお金を持たせてくれました。

タイに知り合いがいたわけではないので、旅行会社がタイ在住のカメルーン人を紹介してくれて、助けてもらえることになっていました。そうでなければ、空港からどこに行けばよいかすらわかりませんでした。紹介されたカメルーン人の家の近くにキリスト教系の学校がありました。そこで、私がキリスト教徒であることと、カメルーンで経験したことを話して、仕事を探していることを伝えたら、雇ってもらえることになりました。それで、

在留資格を変更して、教員として働けるようになりました。

はじめは学校の寮に住みましたが、貯金もできたので、しばらくしてから、学校の外にアパートを借りました。カメルーンの家族とは連絡をとらなかったのですが、母が亡くなったと知り、父に連絡をとりました。村で次々と人が亡くなっているということでした。村では、私がなすべきことをなさなかったから、災厄をもたらしたのは私だとされていました。それで村人たちは私を探していました。父は村の人たちに脅迫されていました。私が村に帰らなかったのも、その後、父も殺されました。私にも呪いがかけられたということです。村人にも、どうやってか、私がタイにいるということが知られてしまいました。命の危険がありました。

タイでは難民申請ができないので、近いところで難民申請ができる国を探し、日本に行く可能性を追求しようと思いました。それで、まずは観光ビザで日本に来ました。混乱していたので、とにかくタイを離れることが目的で、他の可能性は検討しませんでした。

## 来日後

成田空港に着いて、どこに行けばいいかわかりませんでした。幸いなことに、空港には無料のWiFiがあり、それでスマートフォンで難民支援をしているNGOを探し、訪問しました。どこにいけばいいかもわからないと伝えると、小さなホテルを紹介してくれて、そこに1週間滞在しました。それから難民申請をしました。

日本にはもちろん誰も知り合いはいませんでした。NGOが提供してくれた部屋で3か月過ごしてから、RHQ（難民事業本部）の支援を受けてアパートを借りることができました。1年間仕事が見つからず、その間はRHQの支援で生活していました。ボランティアの日本語教室でひらがなやカタカナを学びました。漢字は難しすぎてまだ書けません。

仕事をインターネットで探していたのですが、上野のアパホテルで職が見つかり、1年ぐらい清掃とベッドメイクの仕事をしました。仕事が見つかった段階でRHQの支援は打ち切りになりました。アパホテルは賃金が安くて生活費が足りないのも、もっと給料の高い仕事を探しました。そして、アメリカ人が経営するハウスクリーニングの会社で雇ってもらえました。ゲストハウスの清掃です。指示された住所に向いて、トイレやキッチン掃除をしますが、とても汚くて、ストレスが多いです。毎日仕事があるわけではないので、1か月で20000円にしかならないこともあれば、10万円ぐらいになることもありました。コロナで仕事がなくなり、今は休職中です。

日本では、日本語が話せないといい仕事は得られません。近所のフィリピン人に、ケアギバーの講習に行くことを勧められました。受講料も安いからと。講座は日本語ですが、スマートフォンのスナップショットでテキストの写真を撮って英語に翻訳して読んでいます。講座では、高齢者介護施設での実習もやりました。人を助けるのは好きだし、お年寄りと遊ぶのも好きなので、介護の仕事も好きです。仕事では、日本語でレポートも書く必



要があります。大変ですが、いずれにしても日本ではすべての仕事が大変なので「がんばる」。

講座は週1回土曜日のみなので、働きながら6か月続けました。講座を修了して、今は介護の仕事を探しています。ハウスキーピングの仕事は毎日あるわけではないのですが、介護の仕事ならば毎日働けます。今は、介護施設の面接を受けています。

## 社会関係

教会でカメルーン人に会うこともありますが、ナイジェリア人に会うことのほうが多いです。カメルーンで通っていた高校はカトリックでしたが、私自身が選択して信仰したのは使徒キリスト教会ですが、この近くにはありません。教会には毎日曜日に行きますが、水曜日に会合があるので、それに行くこともあります。ほとんどがナイジェリア人です。

友だちと外出することはめったにありません。仕事が忙しいので。東京スカイツリーや東京タワーにはナイジェリア人の友だちと行ったことがあります。ナイジェリア人の友だちのほうがカメルーン人よりも多いです。草加で開催されるカメルーン人のミーティングに行くことはあります。料理を食べるだけのこともあれば、議論することもあります。

## カメルーンの様況

カメルーンの親戚や知り合いとは、もうつながりはありません。そもそも、カメルーンの英語圏は戦争状態で多くの人々が殺されていて、人々はナイジェリアなどに逃れています。何が起きているかはインターネットで把握しています。英語圏では多くの人々が亡くなっています。数千人が亡くなったと言われています。Googleで、“War in Cameroon”と検索してみてください。今現在、多くの人々が殺されていることがわかります。そのために英語圏のカメルーン人が戦争を逃れて日本にも来ています。

これは、政府と民衆の戦争です。村の人々を殺したのは軍隊です。Googleで動画を見ることが出来ます。多くの人々がナイジェリアやガーナなどに逃れています。村の人々がどこに行ったかすらわかりません。Facebookでいところの一人が軍隊に射殺されたことを知りました。そういう方法でしか親戚がどうなったかもわかりません。

カメルーンはフランスとイギリスに植民地にされていたので、フランス語と英語が話されていますが、英語話者は20%程度にすぎません。フランス語話者がマジョリティです。でも、両者は平等で、大統領は、フランス語話者の次は、英語圏から大統領を選ぶという合意がありました。フランス語圏と英語圏は、それぞれ、教育など独自のシステムがあります。両者は異なるシステムですが、平等という原則でした。

しかしフランス語話者の大統領が、すべてをフランス語化しようとしてしました。英語圏の仕組みもフランス語圏の仕組みにしようとしたのです。そのためにすべてが変更されてしまいました。英語圏の人々は反対しました。そもそも合意に違反していると。そのために戦

争が起きました。英語圏は軍隊に占領されて、破壊されて、子どもも殺されています。胸がつぶれる思いです。

英語圏だけではなく、今ではフランス語圏でも逮捕が頻発しています。殺人も多く起きます。私は失望しています。先週、反政府デモがあり、100人以上が逮捕されました。胸がつぶれる思いです。

草加でのミーティングは英語です。フランス語圏のカメルーン人でも、日本では英語を話します。フランス語は日本では通じないので。英語圏とフランス語圏のカメルーン人の間に対立はありません。問題は市民の間にはないのです。政府の問題です。英語圏出身者とフランス語圏出身者の間に問題はまったくありません。政府が軍隊を投入して、市民を弾圧しているのです。

大統領の批判をすると逮捕されます。カメルーンが平和的な国だったことは一度もありません。市民は政府批判をすることを恐れています。逮捕されるからです。人々は声をあげてくれることを恐れています。それで苦しんでいます。

でも、今、人々は声をあげはじめました。新しい野党のリーダーが現れて、「永遠に沈黙しているわけにはいかない」と語りかけ、人々が発言し、姿を現すことを支援しています。しかしそうすると逮捕されるし、殺されるのです。カメルーンは平和な国とは言えません。

そもそも40年間同じ大統領なのです。人々は貧困で、仕事もありません。人々は、政権交代を求めています。でも、今は軍隊が権力を掌握していて、声をあげると殺されるので人々は恐れています。

私の村には、もう誰もいなくなっていました。戦争で人が殺されたからです。私を探していた人たちも、村を去ってしまいました。村にはもう誰もいません。子どもたちも、4年間ぐらい学校にも行けない状態です。

これらは2016年以降のことです。私がカメルーンを離れたあとに起きたことです。村では多くの家が爆破されました。カメルーンに戻ることは、もはや不可能です。難民申請は、2016年が最後のインタビューでした。今は結果を待っています。その間に状況が変わってしまったので、それを入管に伝えたいです。

世界中がカメルーンの戦争について、何も言いません。英語圏の人たちに対する虐殺が起きているのに。私は、毎日胸がつぶれる思いでいます。こんなことが終わるように毎日祈っています。カメルーンの家に戻りたいです。でもどうやって戻ることができるのでしょうか。私の家はもうありません。すべて焼き討ちされてしまいました。

## 日本での経験

日本での生活ではストレスになることがたくさんありますが、いつもハッピーでいようと心がけています。そうしないと、カメルーンにもストレスになることがたくさんあるので、両方でストレスがあると、もはや生きていけません。だから日本での生活はハッピー

でいようとしています。

日本での生活はよいのですが、ストレスになるのは、言葉と仕事です。日本語を話せないと、仕事が見つからないのです。人種差別の問題もあります。日本の企業はアフリカ人を雇用したくないと感じさせられます。明示的に言葉で言われなくても、その人の態度でわかることもあります。すべてのことが言葉になっていなくても伝わります。もちろん、ほとんどの場合、生活のなかで、日本人はとてもフレンドリーに接してくれます。

人種差別を職場で経験したことはありません。雇用されるときに経験します。同じことでも、日本人への話し方と、私への話し方が違うことがあります。明確な人種差別だし、私を見下すような会社では働きたくありません。自分に自信があるから、それを気にすることはありません。私が実際には何をできるか知っているし、自分には能力があると知っているから、人に何を言われても気にしません。でも仕事を得ることが難しいです。コロナでとくに難しくなりました。

どんな仕事も完璧にできる自信があります。タイで教員をやっていたときも、生徒にも、すべての人に愛されて仕事をしていました。私も、自分がやる仕事は何でも愛しています。どんな仕事でもできます。介護の講座は、日本語の問題で難しかったです。テキストが漢字で書かれているから読めないし、最初の週はもう無理だと思いました。わからないことがあっても、質問の仕方わかりませんでした。でも、最後までやると決心しました。日本はすべてお金お金のなので、仕事がないと生活できません。

でも、日本語ができないと、仕事が完璧にできません。日本語で質問されても、意味がわからないから答えられません。講座の受講生には、外国人ではフィリピン人がいましたが、私はクラスでたったひとりの黒人でした。日本語ができないので、実技もできないと思われていたのですが、実技は完璧にできて、みんな驚いていました。おむつの替え方、麻痺した人をどうやって扱うかなど、実技の前に教員が見本を示してくれるので、わかります。私は完璧にできました。今は、日本語も理解できるようになりました。

追記：その後アヤさんの在留資格は更新されず、仮放免になってしまった。

(2020年10月1日に英語でインタビュー。日本語訳・再構成：稲葉奈々子)

## チオマ（仮名）—強制結婚を逃れて来日

## 来日まで

ナイジェリアのラゴス生まれです。家族もラゴスに住んでいます。母語はピジン・イングリッシュで、第二言語が英語です。エスニック・グループはイボ族です。父は、小さい頃にはなくなりました。母は去年 65 歳で亡くなりましたが、医者でした。私は、母の再婚相手とうまくいかず、ラゴスから遠い父の郷里で、父のキョウダイに育てられて、いとこと生活しました。ラゴスからはバスで 5~6 時間のところで、親戚は農業で生計を立てています。誰もがお互いを知っているような小さな町です。そこで大学まで通いました。大学では経営学を専攻しました。

ところが、問題が生じました。結婚です。父の故郷の 86 歳の王の 11 番目の妻として結婚しなくてはならなかったのです。結婚したくありませんでした。それで逃げました。アブジャに行き、教会の牧師が心配してくれて、弁護士が日本に行く手伝いをしてくれて観光ビザを取得しました。21 歳のときです。今は 27 歳になりました。

日本に来ることが結婚を逃れる唯一の可能性でした。日本以外に選択肢はありませんでした。日本に知り合いや友だちがいるわけではないし、来たあとに何が起きるかなどを考えずに、ただ、日本なら行けるということで、日本に来ました。若かったので、旅行についてもよくわかっていませんでした。日本が唯一の選択肢だったので、それを選ぶしかありませんでした。でも、日本は平和なのでよかったです。安全なところが、とてもいいです。ナイジェリアからとても遠くて、誰にも追いかけてこられないのも安心です。

## 来日後

成田に着いて最初の日にはインターネット・カフェで寝て、そこで難民申請について調べました。難民を支援している NGO の存在を知って、連絡をしました。事務所に行くと、難民申請の手続き方法を教えてくれて、住む場所も提供してくれました。そこに 2 年間住みました。

最初の 2 か月は日本語を勉強したのですが、すぐに妊娠し、体調が悪くて、しょっちゅう病院に行っていたので、仕事はしていません。出産後も体調はよくなりません。病院通いでした。

子どもの父親はアメリカ人ですが、結婚はしていません。もう連絡もとれません。「しょうがない」。だから自分ひとりで面倒をみなくてはなりません。ナイジェリア大使館には行けないし、子どもの父親とも連絡がとれないので、子どもは無国籍です。今年 3 歳になります。

難民認定の結果がでていなくて、今は 6 か月の特定活動の在留資格です。子どもを出産したあとは子育てのみです。仕事を探そうと思って、保育園にもずっと申請しているので

すが、働いていないからと認められません。まず仕事を見つけないと保育園には入れないと言われるのですが、保育園に子どもを預けないと、そもそも仕事が見つけれません。仕事を探す間、子どもを預かってくれる人もいません。誰も手伝ってくれる人がいないのです。

カナダの TESL (第二言語としての英語教授法) の資格を持っているので、英語の教師などやりたいのですが、そういうコネクションもありません。基礎的な日本語しか話せないのので、仕事を見つけられないのです。

日本では、何もかもがナイジェリアとは異なっていて、ついていくのが大変です。子どもが生まれた頃は、私は食事ができなくて痩せていました。妊娠中は、牛肉しか口を通りませんでした。牛肉の食べ過ぎで胆のうの病気になりました。その後今度は、8 か月果物しか食べられなくなりました。今は普通に食べられますが、手術で胆のうをとってしまったので、服薬を続けています。

生まれたとき、子どもがとても小さくて、本当に怖かったです。薬を飲んでいたので、母乳をあげることもできませんでした。でも今は大きくなって、3歳だけれど、5歳ぐらいにみられます。とても頑固で大変です。

胆のうの手術以降、区役所のケース・ワーカーが支援してくれていて、医療扶助や住宅扶助や児童扶養手当などももらえています。ケース・ワーカーには、仕事をするように言われるのですが、求人に応募しても、却下の連続です。それで毎日息子と家にいるだけの生活です。子どもの健康診断などは区役所からメールがくるので、スマホで翻訳して対応しています。

ナイジェリア人の友だちはいません。ナイジェリア人のコミュニティとも付き合いがありません。アフリカ出身の友だちもいません。友だちは、2人の日本人のみです。同じ日に子どもが生まれて、病院で知り合って友だちになった日本人で、たまに一緒に外出します。もうひとり、どうやって出会ったか忘れました。そもそもほとんど外出しないので、黒人に会う機会もありません。カトリック教会は、以前はイグナチオ教会に通っていましたが、今は交通費もないし、コロナで行けません。そこで出会ったカメルーン人と付き合いがあるぐらいです。

日本人の友だちは2人とも私の状況は知りません。一緒にランチをしたり、子どもを遊ばせたり、ミュージアムに行ったりします。3人とも同じ年齢の子どもがいて仲良くなりました。

今は、どうしていいかわからないときなど、難民支援協会に電話で相談することはあります。病院で医者に病状を説明できないときに、電話で通訳をしてもらったりしています。

日本での生活は、何もかもがストレスの原因です。シングルマザーであること、難民であること、人生がこれからどうなるのかわからないこと、話をする人が誰もいないこと。何もかもがストレスです。病気のときに病院にもいけるし、区役所の支援も得ることがで

きる。でも、たった一人だし、困難を共有できる人もいない。それがストレスです。

日本では誰もが忙しくて、人と出会うのも難しいです。子どもと外出すると「かっこいい」と話しかけてくる人がいるので、そうやって友だちになることがあります。人と会うのは、そうやって子どもを介したときです。

でも、子どもがいるのでできないことも多いです。スーパーに行くときも、子どもと一緒にいかななくてはなりません。ベビーカーを2階まであげて、それからさらに買った荷物をアパートまで運ぶために何度も階段を昇り降りするのも大変でストレスです。通院している病院も待ち時間が4時間はかかります。子どもと一緒に行くのですが、子どもは黙っていられなくて、騒いで家に帰りたがります。

ほとんどの時間は息子と家で過ごしています。息子がいるので外出できないのです。友だちは仕事をしていて、5時以降しか会えないのですが、子どもはその時間は寝ているし、誰にも子どもをみてもらえないので出かけられません。

シングルマザーである大変さは、経済的な問題だけでなく、何もかも自分ひとりでやらなくてはならないこと。お風呂に入れたり、おむつをかえたり。ちょっとしたときにも、誰かに見てもらえない。何かあったときに話ができる人もいない。心配事ばかりです。将来の計画も立てられません。難民についてどんな結果がでるのかわからなくて心配ばかりです。

(2020年9月24日に英語でインタビュー。日本語訳・再構成：稲葉奈々子)

## マルジャン（仮名）—自由を求めて来日

### イランでの出来事

5歳の時以来、つらい人生を送ってきました。5歳になるまでは、民衆のことを心から考えてくれる国王がイランを統治していました。モハンマド・レザー・パフラヴィーです。彼は、とくに女性のことを心から考えてくれていた王です。私の5歳までの記憶は、とてもよいものです。でも、パフラヴィー国王はイランを離れねばならなくなり、私の人生も激変しました。イラン革命が起きたのです。男性と女性の中の戦争、貧困層と富裕層の中の戦争が始まりました。私は人生をよくするために、幾度も努力しましたが、何も変わりませんでした。

イスラム共和国は、誤った考えと絶望を私たちの国に広げました。私の親も、沈黙させられています。大人たちは、国王がイランに留まることができるように努力すべきだったのに、そうしませんでした。

父は、もとはレストランのあるホテルを経営していたのですが、イラン革命でその場所もとられてしまい、戻ってきませんでした。父はそのあと定職がありませんでした。小学校の教員として働いていた母が少ない給料で家族を養っていました。彼女もとても大変な人生を送りました。イランは豊かな国です。石油も金も天然ガスもたくさんあります。それなのに、私たちは貧しいのです。

私の祖父は子どもが9人いて、教育も小学校までしか受けていません。祖父は軍服工場の労働者でした。でも彼は、子どもがまだ小さいときに家を買うことができました。テヘランの中心部に120平米以上ある大きな家を買えたのです。母は小学校の教員だったので、仕事は尊敬されていて、生活の安全も保障されていました。でも、革命のあと、権利を何もかも奪われてしまいました。母は、教員が協同組合方式で建設した集合住宅の一戸を買って住んでいたのですが、その家もイスラム共和国政府によって奪われました。政府の協力を得た悪徳不動産プロモーターが教員の家族全員をその集合住宅から追い出したのです。彼女は悲しみ、怒っていましたが、沈黙していました。政府を批判した多くの若者が殺されたので、私や私の弟のことを心配して、沈黙したのです。

イスラム共和国は、死後にいい生活が実現すると人々に信じさせようとしていました。「お金を私たちによこさない、死んだあとにいい生活が実現するから」と。大嘘です。イランの人々は、イランの宗教を嫌っています。もちろん全員がそうというわけではなくて、宗教を愛そうとしている人もいますが。

父親のなかには、娘がヒジャブをしていなかったり、男性と話したからといって、娘を殺す人もいます。誰も、それを当たり前と思うようになったのです。以前はそんなことはありませんでした。

私の両親も変わりました。両親は私が歌うことを禁じました。なぜなら女性が歌うこと

はイスラム教ではよくないことだからです。誰も私の才能について気配りをしてくれませんでした。私は黒いスカーフで頭を覆うことを強制されました。それが嫌いでした。ヒジャブを好きになったことは一度もないのに強制されました。私は勉強が好きだったので、私の才能を伸ばすことは誰も考えてくれませんでした。子どものときに学校の先生に、「あなたは科学者にはなれない」と言われました。私は精神的に傷つけられました。精神的に傷つくと、勉強を続けることもできなくなります。いつも悲しくて、勉強に集中できませんでした。それでも、私は闘って勉強を続けました。そうすると、別の問題に直面しました。学校は、私の期末テストを何度も紛失したのです。点数がどんなによくても、私の学期末テストは行方不明になりました。

子どもの頃から、女性差別を感じていました。私の個性かもしれないし、他の友だちよりも勇敢だったかもしれないです。友だちはみな、10代の若者なので、男女が自由に話をしてはいけない、話したら違法となると、自然にそのことばかり考えていました。セクシュアリティのことばかり考えてしまって、他のことは考えられなくなります。なので、友だちとは、議論をすることはありませんでした。

私が自分の権利について家族や学校やコミュニティで話すと、いつも私は黙らされました。私が話したのは、たとえば着てみたい服、勉強したいテーマ、アートのことなど、すべて女性の権利に関することです。

高校卒業後、大学図書館のタイピングの仕事を長く勤めました。数年後に大学に入学しました。私は英語とペルシャ文学を大学で勉強しました。でも学位はとりませんでした。大学はテヘランにありました。英語を4年、ペルシャ文学を4年学びました。世界中の人々とコミュニケーションしたいと子どもの頃から思っており、それで英語を学びました。ペルシャ文学は、書くことが好きだったので学び、短編小説を書いたりしていました。家族からの金銭的支援がなかったので、自分で働きながら大学に通うしかありませんでした。当時は親と一緒に住んでいました。親はとくに私が勉強を続けることを支持してくれたわけではなかったです。

イランにいるときには、緑の党で数年間、機関紙の編集部で働いたことがあります。今は米国に住んでいるイランの有名な元政治家が、その当時緑の党にいて、一緒に働いていました。緑の党はイスラム共和国に反対していると思ったのに、日本に来てからいろいろ調べると、同じ穴のむじなだったと知って、がっかりしました。

新聞社で働いていたときは、編集の仕事をしていました。私は女性の権利、戦争と平和などについて記事を書きましたが、それが採用されることはなかったので、結局、編集だけをしていました。

経験から女性の権利について知るようになり、新聞記事を編集するようになって、女性が男性に殺されたり、子どもが男性に殺されたり、女性や子どもが政府に殺されたりしていることを知りました。新聞には、起きた事実をそのまま書きますが、それを問題として



書いたり、分析はしたりしません。でも、私はつねにニュースを分析していました。

私はマッサージ師の資格も持っています。イランで資格をとり、テヘランで1年間、マッサージ師養成と顧客への施術を行う機関で働いていました。施術料金が高いので、お金持ちしか来ない場所です。政府の役人や家族も顧客でした。普通の人は来ません。

不動産開発会社のインスペクターの仕事もやりましたが、賃金未払いでした。ビル建設が完成してから支払われるのですが、工事がいつまでも終わらなくて、私が日本にくるときもまだ終わってなくて、結局支払われませんでした。

私は何度も転職しました。ボスから性的関係を求められてやめたり、賃金が未払いなのでやめたり、私の人生は闘いの連続です。銃を使ってではなく、平和的な闘いですが。

私は6年前に離婚していて、それ以来一人で子どもを育ててきました。2年間、子どもの親権をとるために闘いました。私は、自分自身と子どものための食べ物や生活する場所を探すのに、いつもつらい思いをしてきました。

## 来日の経緯

日本に来る2年前にイスラム教をやめました。女性差別的だし、女性を奴隷扱いする暴力的な宗教だからです。それで私はイスラム教をやめることにしたのです。私はそのことを身近な友だちに話しました。それはとても危険なことでした。それで、女性としての自らの自由と安全のために、イランを離れることにしたのです。

他の宗教を信仰したわけではなくて、単にイスラム教をやめました。以前は、イスラム教を実践していました。コーランに書いてあることも信じていました。でも、イスラムを離れて、もはやコーランに書いてあることも信じていません。お祈りもしないし、ヒジャブもつけません。

イランにいたときはもちろんヒジャブをつけていました。海でもスカーフを着けて泳がなくてはならないのです。イランで、スカーフをつけてダイビングしたことがあります。スカーフを着けたあとに、ダイビング・スーツを上から着るのです。クレイジーです。

私は子どもと外国に移民することを決意しました。日本に来たのは、半ばアクシデントです。私たちのパスポートでは、行けない国が多いのです。ビザを取得するのも困難で、お金もかかり、政府からの支援も必要ですが、私にはそのどれもありませんでした。家族からの支援もありません。チケットは自分で買いました。アパートを売ったのです。私はすべての財産を手放しました。

ビザの取得は日本に住んだことがあるイラン人に手伝ってもらいました。私と子どものビザ申請をしました。貯金があったし、許可されてもいい状況だったと思いますが、却下されました。手伝ってくれた男性が、まず、私ひとりのビザ申請をしたほうがよいと助言してくれました。日本大使館でその男性は、私がいい人で、自分も一緒に行くと説明しました。今度はビザが発行されました。でも、子どもと一緒にいけなくなってしまいました。

そのため、私は、まずその男性と来日しました。将来、子どもが来日して、よい生活が送れるようにしたいです。子どもも、イランにはもう住めないのです。学校の教員も子どもがムスリムをやめたことを知っており、とても危険なのです。

家を買ったお金は、もう手元には残っていません。子どもの生活費としてイランに残してきましたし、東京に到着して数日ホテルに宿泊する費用などで消えてしまいました。

## 来日後

東京に着いたらすぐに仕事が見つかる、一緒に来日したイラン人男性に言われていたのに、それは嘘でした。空港から上野に到着して、新宿や、群馬のホテルにも泊まりました。仕事が見つかるかもしれないと言われて、群馬まで行ったのですが、見つかりませんでした。工場での仕事を探していたのですが、ビザなしでは雇ってもらえないのです。

その上、彼は、日本でお金をためたら、子どもと私がカナダに行くビザを日本のカナダ大使館で申請できると言いました。でも、それも非現実的な空想でした。カナダに行くビザを申請するために、日本の在留カードも銀行の預金残高も必要ですが、そんなものないですから。

結局、日本に来て、9 か月間仕事が見つからなかったのですが、就労許可のある在留資格がもらえて、難民を支援する NGO の紹介で、アラビア料理を出す高級レストランで働きました。私はキッチンで玉ねぎを切ったりする仕事をしていました。日本で仕事をする初めての経験でわからないことだらけでしたが、私が差別を受けていることだけはわかりました。私の給料が他の人とはまったく違ったのです。外国人だからというより、男性より安かったのです。時給 900 円でした。そこから税金を引かれます。給料が安くて、アパート代を払うと終わりになってしまい、子どもに送金できませんでした。NGO が私を紹介してくれるのは、給料が最低賃金のところですが、でも、自分で探せば、もっと給料がいいところが見つかるのです。

でも、我慢して 6 か月間働きました。がんばって仕事をすれば、認められて給料があがるかもしれないと思ったのです。でもコロナで仕事がなくなりました。それで Facebook で知り合ったイラン人に相談したところ、その人の恋人が病院の制服をクリーニングする工場に働いているということで、その仕事を彼女に紹介してもらいました。そして、そのイラン人と彼女と一緒に住んでいるアパートの一室に居候させてもらいました。ところが 1 か月ぐらいたったところで、その女性が、私にその工場に働いてほしくないと言いだめたのです。なぜならば、彼女のパートナーのイラン人が私と性的関係を持ちたいのではないかと疑ったようです。実際、それは事実でした。居候をはじめて 1 週間もたつと、その男性が、私と性的な関係を持ちたいがために泊めてくれたとわかりました。気がつかないふりをしましたが、直接、ノーと言わざるをえない状況になりました。ノーと言ったところで問題が始まりました。私が彼からの誘いを拒絶すると、彼は私を支援してくれなくなり

ました。そして、家から出ていくように彼女に言われました。それで仕事も失いました。職場の上司に、私はもうその工場で働けないと告げられました。その女性が私を信用して仕事を紹介したのに、もう信用できなくなったから、ということでした。

私は住む場所も仕事もなくして、他を探さなければならなくなりました。インターネットで食肉加工工場の仕事をみつけました。肉体労働は運動のようで好きなので、その仕事も好きでした。でも2か月ぐらいで、コロナのために私は他数人の外国人とともに解雇されました。生産量が減ったので、従業員を減らさなくてはならなかったのです。雇用主からは謝罪されましたが、いずれにしても首を切られました。それから、アフリカ人の友だちが、私に別の食肉加工の工場を紹介してくれましたが、そこもコロナで解雇されました。

そのあとはイラン人に助けを求めようと思いました。でも、私は日本のイラン人のコミュニティと付き合いがありません。在日イラン・コミュニティはほとんど男性というジェンダー問題があり、私と性的関係をもちたいと思う男性が多く、私は性的関係を持ちたくないのです。

それで他の仕事を探さなくてはなりませんでしたが。女性だけのシェアハウスに入居しました。男性がいないので、性的な問題もなく、安全でしたが、食肉加工の工場に通うのに片道2時間かかりました。

食肉加工場の仕事なくなったあと、仕事が見つかりませんでした。でも日本政府の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の支援を得ることができました。コロナで失業した人のための支援です。本当に驚きました。イラン政府はそんなことは絶対しません。私は絶対にこの支援を忘れません。申請は本当に大変でした。役所に行って、いろいろな人に次から次へと質問をして、申請できました。役所の人たちは本当に親切でした。

イスラム革命後のイランではありえないことです。私は一度も政府に助けられたことはありません。日本政府は、私が日本人ではないけれど、人間扱いしてくれたのです。私には日本人の家族がいるわけではないけれど、日本政府は私を人間として扱ってくれました。3か月支援してもらえました。私はこのことを決して忘れません。

そのあとはイラン人の友だちが紹介してくれて、パートタイムの工事現場の警備員の仕事が見つかりました。毎日電話をかけて、その日に仕事があるかどうかを確認します。毎日仕事があるわけではないのですが、私はこの仕事が好きです。夜間の仕事です。寒いですが、仕事で汚れるわけではないし、星が好きなので、仕事も好きです。屋外なのでセクハラもありません。この仕事を続けられるとよいのですが。

子どもたちは、私の親に面倒を見てもらっています。でも、親はもう高齢で、私が親を支援しなくてはなりません。キョウダイは自分の家族があるので、支援は期待できません。もはやムスリムではない子どもにとっては、イスラムを信仰している私の両親との同居は精神的に大変です。私と離れて暮らすのも、もちろん大変です。イランでムスリムではないことは、政治的な問題でもあります。そのために私の息子はうつになり、3度も自殺未

遂をしました。私は子どもと電話で話すしかできません。安全な日本に来て、また一緒に暮らせるからと希望を捨てないように励ますしかありません。人生は簡単ではないです。

### イランの人々の自由のために

私は 2019 年に日本に来てからの 2 年間で、イランでは情報にフィルターがかけられていて、知ることができなかつた事実を、知ることができました。それで、私は、世界とイランで起きた歴史をもっと理解するために勉強しています。というのも、日本で私は、生活の安全や、女性の自由など、よいものをたくさん得ることができました。もちろん、給料が女性のほうが安いことのように、日本にも女性差別はあります。

この 2 年でイランでは多くのことが変わってきました。若い人たちが政府に抗議するようになったのです。でも、抗議した若者 1500 人が政府に殺されました。私も日本の人々に、路上にでてイランに対して声をあげることを呼びかけたかったです。でも、ひとりでは何もできませんでした。

イランの人たちは自分のことで精いっぱい、他の人を助ける余裕などありません。それが今のイランの雰囲気です。誰もが自分のことで問題を抱えています。イラン革命の前は、イラン人はお互いに助け合っていました。お互い助け合うのはイランの文化なのです。イラン人にはホスピタリティがあります。イラン人は他人が好きなのです。でも、今の状況では、自分たちのことしか考えることができません。ストレスが多すぎるのです。もしストレスや問題がなければ、他の人にも手を差し伸べる人々です。でも、今はそれができないのです。

私は、日本にいればイランに自由をもたらすために貢献できます。私には、事実について語る権利があります。嘘はつきたくありません。誰にも私を止めることはできません。もし私を止めたかったら、私を殺すしかないですが、日本政府はそんなことは許さないでしょう。イランにいたら、そんなこともありえると思います。私は日本で素晴らしい自由を享受しています。私はこの自由を愛しています。

私は前向きの姿勢であろうとしています。仕事をしてお金を稼いでいますし、仕事中に夜空の星を見ることもできます。

私はイラン政府に手紙を書きました。といっても、スマートフォンに保存してあるだけなのですが。

### イラン・イスラム共和国への公開書簡（抜粋）

イスラム共和国が私の国を占領したとき、私は 5 歳の少女でした。あなたがたは、私のジェンダーを罪とみなしました。あなたがたは、私のすべての希望を奪いました。私は、女性の権利と希望を、人生

をかけて追求し、平和的に闘い続けてきました。孤独な闘いでした。私は、女性であることのシンボルのすべてが、ひとつひとつ、奴隷のシンボルであり、男性の奴隷であるシンボルに変わっていくのを目撃しました。私は、男性によって酸をスプレーで吹きつけられたり、口のなかを血で一杯にされたり、歌うことを禁じたりされる女性たちを目撃しました。私の魅力的な友だちだったイランの男性たちのひとりが、醜い悪魔になってしまったこともあります。安心できる誠実さを、私の周囲の人たちは失っていきました。裏切りとモラルの欠如に支配されていきました。私の夢と希望は抹殺されました。でも、私は沈黙しないし、死を恐れず、あなたに向かって叫びます。

私は叫ぶ。奴隷は立ち上がり、静かに走り去る。さもないと投獄を宣告される。あなたがたの嘘は無効だ。奴隷は立ち上がる。新しい平和的な思考がもたらす蜂起だ。そこにあなたがたの居場所はない。

(2021年3月28日に英語でインタビュー。日本語訳・再構成：稲葉奈々子)

## ンドロ（仮名）—暗転した留学

## 来日まで

カメルーンのフランス語圏のドゥアラ出身です。家族は今もドゥアラに住んでいます。父は定年退職しましたが、カメルーンの鉄道会社カムレールの技師でした。母はフランスから自分で輸入した化粧品の個人販売をしていました。

私は5人キョウダイの一番上です。妹はフランスにひとり、弟はスペインにひとりフランスにひとりいます。もう一人の弟もドイツにいたのですが、今はカメルーンに帰って5年たちます。スペインに住んでいる弟は料理学校を卒業して、スーパーマーケットの総菜の料理長を務めていましたが、今は不動産会社で働いています。

フランスに住む妹は、最初はドイツに留学し、卒業後にフランス語とドイツ語の通訳の仕事をしていました。その後フランス国籍を取得して、ドイツ語教員の国家資格をとり、高校の教員として働いています。

私は、国際金融の分野で働きたいと思っていました。夢はIMFで働くことでした。高校を卒業したらアメリカ合衆国に留学したかったのですが、お金がありませんでした。そのためケンブリッジ大学のカメルーン・キャンパスに進学しました。研修でアメリカに6か月行くことができます。同時にカメルーンの大学の法学部にも通っていました。アメリカでの研修から戻ってきてから法学部も卒業するつもりでした。でも、ケンブリッジ大学のほうは2年間学んで卒業し、結局日本に留学することになったので、法学部のほうは中退しました。日本で大学を卒業できれば、それでいいと思ったのです。

なぜ日本に留学することになったのか。そもそも、ケンブリッジ大学の派遣でアメリカに研修に行くはずでした。大学が研修先も紹介してくれました。ところがアメリカ大使館がビザを発行してくれなかったのです。カメルーン・キャンパスから派遣されて、最初にアメリカに研修に行った5人の学生が、6か月の研修が終わっても、一人もカメルーンに戻らず、不法滞在のままアメリカに滞在し続けたからです。それが問題にされて、私たちは2回目に派遣されるグループだったのですが、ビザが発行されませんでした。それで、香港なら行けるといふことになり、私は了解しました。ところが、フランスにいる妹から、カメルーン人の友だちが日本にいるからと紹介され、その友だちの勧めで日本に留学することにしたのです。

その友だちはICUかテンプル大学に留学することを私に勧めました。しかし渡日までに必要書類が揃えられそうにありませんでした。それで、やはりその友だちのアドバイスで、まずは日本語学校に入学することになりました。

## 来日後

そのようにして、2001年に留学生として東京にきて、日本語学校に通いました。日本語

をゼロから学ぶのは大変でした。でも、日本で大学を卒業すれば、アメリカに行くチャンスもあるだろうと思っていました。日本に留学する費用は父が出してくれました。ドイツの大学にも合格していたのですが、ヨーロッパには行きたくなかったのです。旅行で行くならいいのですが、留学するのは気が進みませんでした。とにかくアメリカに行きたかったのです。

日本語学校を卒業し、ある私立大学に合格しました。4年間の奨学金も得ることができました。ところが妊娠して、健康状態も悪くなり休学しなければならなくなり、奨学金も失ってしまいました。お腹の子どもの父親は日本語学校で知り合ったナイジェリア人ですが、結婚はしませんでした。休みのときには彼に会うために地方から東京に通っていました。彼は、今は日本人と結婚していて、私とはもう付き合いはありません。娘の国籍はカメルーンです。

娘を出産したのは2005年です。早産でした。大学では、娘を育てながら勉強を続けました。でも、出産してすぐに私はうつになり、医者から休学を勧められて、6か月休学しました。そのとき母に日本に来てもらいました。母は結局10年間日本にいて、2015年にカメルーンに戻りました。母は観光ビザで来て、一度は更新したのですが、そのあとは手続きもよくわからなくて、オーバーステイになっていました。

もとは、母は私の娘を連れてスペインに行く予定でした。いとこと甥がスペインに住んでいたのもう家族合流で行くことができたし、何度もスペインを訪問していました。ところが、カメルーン大使館は3歳以下の子どもにはパスポートを発行しなかったのです。0～3歳児は親のパスポートに記載するしか方法がなく、親と一緒にないと外国に行けないのです。私はすでに1年間休学していたので、それ以上は休学したくなかったので、娘を連れてスペインに行くのは問題外でした。

シングルマザーだったので児童扶養手当をもらえて、楽な生活ではなかったけれど、少なくとも毎日ご飯を食べることができて、屋根のある生活もできていました。休学して1年を失ったので、追いつくために必死で勉強しました。2セメスター分の単位を1セメスターでとるために必死で勉強しました。

奨学金は取り消しになってしまったのですが、大学を中退したくありませんでした。絶対に卒業したかった。どうすればいいかわかりませんでした。それで1セメスター休学して学費を稼ぎました。そのとき母が住んでいた町で、私も一緒に働きました。

最初は、母は家でカメルーン料理をつくって、お弁当のようにして売っていました。近所にカメルーン人がたくさん住んでいるので売れました。その後、母はアフリカン・レストランでアルバイトをはじめました。それで収入も若干得ることができました。多くはなかったけれど、助けにはなりました。

私は、大学を卒業した後、英語教師の仕事を探しましたが、見つかりませんでした。それで就職活動のために在留資格を3か月延長したのですが、見つかりませんでした。さら

に3か月延長したのですが、やはり見つかりませんでした。6か月以上は延長できないので、ある私立大学の大学院を受験して合格しました。授業料を全額免除してもらえ、奨学金ももらえました。ところが、合格したときには、就職活動のための在留期間として認められる6か月を過ぎていました。そのため入管で在留資格を延長できないと言われました。それで、娘と一緒に1か月間カメルーンに戻って、日本大使館で留学ビザをとりなおしました。母は日本で働き続けていました。

その時点で、もう他の国に行こうとは思っていませんでした。日本に慣れていたし、大学院にも合格したし、アメリカに行くにしても、お金がありませんでした。アメリカも日本と同じで大学はお金がかかり、ヨーロッパのように無料ではありません。もう一度アパートを探して、娘と引っ越して一からやり直したくなかった、というのがあります。娘の学校も探さなくてはならない。そのためのお金がありませんでした。でも、日本では大学院で奨学金がもらえることになっていたし、児童扶養手当もあって少しは助かっていたので、そのまま日本で勉強を続けようと思いました。

母は働いていたので、私は大学院に通いながら娘の面倒をみて、夜勤の仕事をしていました。大学院ではチュニジアのアフリカ開発銀行での研修が決まったのですが、渡航費も4か月ぶんの現地での生活費も自費なので、研修に行くことをあきらめました。研修に行くはずだった期間中は、クリーニング工場でパートタイムで働きました。その間、母はカメルーン料理のレストランで働いていたのですが、娘を連れて出勤して、世話をしてくれていました。でもオーナーに、レストランに娘を連れてこないようにいわれて、私が仕事をやめざるをえませんでした。

### 日本での就職と転職を経て在留資格の喪失

2010年に修士課程を修了して、中古車輸出の会社に就職しました。でも、給料が正当な額ではありませんでした。納得できなかったのも、やめて派遣に登録して、学校で英語を教える仕事を探しました。ある都市の小中学校のALT（外国語指導助手）の仕事がみつかりました。その町でアパートを探して契約しました。ところが1年働いたところで、翌年度はその自治体が派遣会社との契約を更新しませんでした。それで派遣会社に別の都市の学校に行くように言われました。でも、その町でアパートをやっと探して、契約するのに敷金や礼金を20万円以上払っていました。11か月しか住んでいないのに、また引っ越して、もう一度敷金や礼金を払うだけの貯金がありませんでした。電車で通うことも考えましたが、交通費は支給されないというし、給料は18万円から16万円に下がるということでした。もっといい仕事が見つかると思って、別の仕事を探すことにしました。

ところが、その頃体調が悪くなりはじめていました。深刻な貧血でした。次の仕事が見つからないうちに、体調が悪くて仕事もできなくなり、仕事をしていないので在留資格も更新できず、2012年から仮放免になってしまいました。立ってられないぐらいの貧血で、



歩くことはもちろんできませんでした。在留資格を喪失して保険がなくなってしまったので、適切な治療を受けることもできず、病院でも最低限の薬しかもらえませんでした。

その頃は母も一緒に住んでいたのですが、10年もカメルーンの家を留守にしていたので、父が、母に戻ってくるように言って、2015年にはカメルーンに戻ってしまいました。母がカメルーンに戻った翌年に、私の健康状態は劇的に悪化したのですが、母も、そんなことになるとは思っていなかったのです。私は2016年の10月に入院して2017年の2月に退院しました。入院している間に、12歳の娘はひとりでは生活できないということで、病院のソーシャルワーカーが手配して、児童相談所に保護されました。家賃を払えなかったためにアパートは失ってしまいました。

退院はしたものの、アパートもないし、2週間、浅草で路上生活をしました。とてもつらかったです。昼間は公園で過ごして、最初の夜は外にいました。2日目は日本人のホームレスの男性がダンボールはあるかと言うので、ないと答えると、ダンボールをくれて、その中で眠りました。朝になるとダンボールは回収されてしまうので、夜にはまたダンボールを探さなくてはなりません。そうして2週間を過ごして、入管に行きました。そこで倒れて入管が救急車を呼んで、輸血を受けました。入管にいたナイジェリア人とフィリピン人女性が助けてくれました。路上に放置できないからとフィリピン人女性が家に泊めてくれました。市役所に一緒に行ったのですが在留資格がないので、何もできないと言われました。また体調が悪くなり、彼女の家の近くの病院に連れていってもらいました。休日で入院できなかったのですが、どうしても診察して欲しかったので、タクシーで別の大きな病院に行きました。そこで検査を受けて、HCUに入りました。深刻な状態の人が入るところです。3日間は、自分がどこにいるかもわかりませんでした。人工呼吸器を付けていました。手術が必要ということでしたが、お金がありませんでした。4か月入院していた病院でも心臓の手術が必要と言われていました。でも保険がないと800~1000万円かかると言われました。でもその金額は払えないので手術はしていません。

病院は治療費を少しずつ払うことを認めてくれましたが、払えないことに恥ずかしい気持ちがあり、病院に行くのもやめてしまいました。2018年に入管で会ったナイジェリア人に、医療費の支援をしてくれるNGOを紹介してもらい、その支援を受けることができ、通院できることになりました。今も月1回病院に通っています。2018年も19年も治療費は帳消しにしてくれました。投薬もしてもらっています。高血圧の問題もあって、上が200になることもあります。250だったこともあるのですが、今は150に下がりました。生理がくると、貧血がひどくなるので生理を薬でとめているのですが、それは対処療法にすぎず、手術が必要と言われていました。

今はカメルーン人の友だちの家を転々としています。最初の友だちのところには1年いました。今の友だちのところは5か月になります。友だちの家族のために毎日料理をしたり、洗濯をしたりしています。ふたりの子どもの世話もしています。

私の娘は児童相談所に保護されていて、施設から中学校に通っています。家がみつからなければ娘と一緒に暮らすこともできません。

入管の職員には、娘が今年の春には高校に入学するので、そうした事情を説明して、嘆願書を法務大臣に提出するようにアドバイスされています。娘にはビザがでるかもしれないけれど、親は帰らなくてはならないと言われていています。でも、医者は、私の健康状態では飛行機で旅行はできないと言っています。

(2020年11月3日にフランス語でインタビュー。日本語訳・再構成：稲葉奈々子)